〈調査部報告 Ⅲ〉

「修験道」予備調査について

——〈祈禱〉の問題に関連して——

はじめに

本宗の教義学においては、長い間「祈禱」の問題や「密教」の問題はある種の疎外された状態に置かれてきた。しかし現実の教団活動において〈修法〉は宗門から公認されてきたし、伝道活動の重要な一翼を成して来たのである。このことが、修法にたずさわる人によってのみとりくまれるのではなく、教団全体の問題として考えられていかねばならないものであることはいうまでもなかろう。

日蓮聖人の教学には明らかに密教的側面があり、教団史的には、後世になって発生したものとはいえ、〈祈禱の形式〉としての〈修法〉が継承されているのである。教義学における〈日蓮密教〉の位置づけは調査部の担当する問題ではないが、現行の祈禱を発生史的な面からと、伝道上の具体的問題としてとりあげて研究することは調査部の重要な研究課題のひとつである。予算上弱体な現宗研で多面的に課題を設定することは不利であるが、教団活動の現状からみて、祈禱の問題は緊急を要するテーマのひとつであるという一致した見解にもとずき、今回修験道の調査にふみきったのである。

予備調査の段階において、すでに本宗の祈禱の問題や密教的信仰の実態と修験道が深くかかわっていることが明らかになってきたのであるが、この問題は非常に多面的な研究を必要とするものであって、早急に結論を急ぐことはできないようである。特に従来の研究成果が乏しく、全く未開の分野に等しいという事情も重なってこの調査研究を困

難にしているのである。

（今回の予備調査は中外日報編集局・野々村智劔師の御好意に負うところが極めて大きくその御助力に対して厚く感謝いたします。また、吉野・桜本坊住職巽良乗師・聖護院門跡執事・宮城泰年師、洞川村銭谷修氏等から多くの御教示を得たことについて感謝の意を表します。更に調査が継続されました場合には、一層の御教導賜りたく御願い申しあげます。）

一、修験道発生の概略

わが国における特殊な宗教として発生した修験道については古くからその資料が乏しいためまとまった研究の成果をみることができなかった。今われわれが参考にできるものとしては和歌森太郎氏の著書「修験道の研究」があるが他には村上俊雄氏の「修験道の発達」など三・四を数えるのみである。今は和歌森氏の通史的な研究を参考としてその概略をみてみよう。

修験道の発生の基盤となっているのはいうまでもなく日本土着の山岳信仰であった。修験道の開祖（祖師）として今信仰を集めている役行者（えんのぎょうじゃ）＝役小角（おずぬ）は伝説化されていて史上実在の人物と神格化されてきた宗教的な像とは大きなへだたりがあるようである。奈良時代にはすでに役小角が仏教者であったという説がつくりだされていたといわれる。しかし役小角は仏教とはかかわりのない人物であったと推定される。上代の日本の社会では呪術が大きな役割をはたしていたが、小角は葛城山（霊場）に住むシャーマンであったらしい。賀茂氏の下で神事にたずさわり、特に予言神托を行ったとされているが、一般的なシャーマンと異って後に妖怪の批難をあびたところから、外と変った呪術を行使したのではないかと推定される。

上代に広く行なわれていた山岳信仰と、伝来した仏教との交渉によって修験道という特殊な宗教が成立するのであるが、その発生は奈良時代に求められよう。仏教のなかにあった山林修業（婆羅門からの影響）の形態が日本にもいち早く伝えられ、当時の僧尼のなかには山林に入って修業するものも多く、わが国に古くから行なわれていた山岳信仰と仏教との結合は容易に行なわれたものと思われる。しかし奈良期の僧尼が山林に入る場合は、所属の寺院が明確にされており、衣食を支給する定めもあった。初期においては山林修業の僧尼に天皇の災疾についての祈願や祈雨を行なわせることがあったため、山林へ入る僧は増加したといわれる。他方に日本の官許寺院・僧団が形式化し頽廃し

たために山林に入った僧団は正統（貴族仏教）から外れる傾向が生れ、また一般庶民の帰依は深まっていった。独立したこれらの僧尼は内外から伝えられる様々な呪術卜占などをとり入れて独自な展開をみせ、それはやがて勅語（延暦十八年）で禁止させるほどに一般に流布されていった。

今回調査を行った吉野山が現在修験道の中心地とされている理由について、和歌森氏の説によれば、京都に近く吉野離宮などもあり、貴族の遊楽の地でもあり、水分山（水源地）として、敬崇されてきたからでもあったとされている。また吉野寺（大海人皇子の出家寺）などがあるから修業に来るものも多かったからであろうという。金峯山の名称は金を産出するのではないかという巷説の流布によって生じ、更に金を盛った山々には神仙が宿っているという中国の道家思想が混淆して金峯神社を開創したものであるといわれる。奈良時代後期の山岳信仰においては金峯山の地位は極めて高かったとされる。東に葛城山との関係をつくるために、役小角が葛城山と金峯山との間に橋を架けたという伝説が生れた。（霊異記）といわれる。

このような山岳信仰＝山岳宗教が、新たな展開をみせるのは、仏教の密教思想が伝来してからである。最澄も空海も平安時代の新仏教を開くうえで、この山岳信仰に大きな関心をもっていたことは史実に明らかである。呪術的な行為が絶対視され、大乗仏教思想から遊離した山岳信仰に対して平安新仏教の興隆は一時期これを改革するかと見られたが、密教思想の普遍化によってその内にふくまれていた「加持祈禱」が主流となり、再び呪術的な面が拡大されていった。そのために山林に入って修業する僧が増加し、密教修学の僧侶の評価は呪術的効験を基準とするようになっていった。

この時期まで仏教と交っていたとはいえ統一された山岳信仰の教理はなかったが〈金の御嶽〉という観念から天部界守護神としての将執金剛神が選ばれ、更にこれが蔵王菩薩へと発展した。伝統としては日蔵（法相宗の僧・BC985寂百余才といわれる）が苦行の末失神し執金剛神から水を施され、従えていた数十の天童に導かれて金剛蔵王を感得したとされている。この蔵王菩薩は、大日如来を感得するまでの守護神として修験者を守るとされる。蔵王菩薩を独自に成立させるところに統一的教理形成の起点が求められよう。密教々理の普遍化と蔵王菩薩の感得、更に大日如来への信仰によって教理の統一がなされるに及んだ。このような山岳信仰の教理的発展と統一のなかで、役小角は蔵王信仰と結合されて神格化され修験者の理想像として信

仰の対象となっていった。金峯山は盛んな信仰者によって賑い、更に修業を求める僧によって大峰踏破が企てられ大峰山上に蔵王堂が建てられ、平安末期には大峯根本道場観が成立した。

大峯山修業が盛んとなって、修験者に対する崇拝が広まると、他の験者と区別して、大峯修業者を〈聖〉とか〈山臥〉といい、今日に至るまで呼びならわされている、〈山伏〉が成立して世俗の崇拝を集めた。金峯・熊野とちがって、女人禁制を行った大峯山は更にその宗教的権威を高めた。大峯山の権威が高まるにつれて、入峯の規律が求められ、儀礼形式が発生し、そこに教団的集合体が生れたとされている。また回峯修業には教理的意義づけと形式が求められ、その危険度などから〈先達〉の意義が生れた。この〈山臥〉は地方の寺院に客僧として拠り、各地の山を踏破していったが、鎌倉期の仏教大衆化の動きのなかで広く民間信仰と結合していった。彼らは真言密教の用具を携行し地方庶民に加持祈禱の呪術を施して信徒を各地に持つに至った。その信徒の広がりは遊行の山臥の性格を反映して拡散的であった。鎌倉後期に至って、今われわれが目にする衣装が固定し非僧非俗の形式も一般化して妻帯することになった。室町期になって、更にその特殊な〈僧〉としての〈山伏〉は増加したが、一方では修業の山域は一定化して山伏相互の関係は強まっていった。

現在も修験道は当山派と本山派に二分され、大峯山の管理権をめぐって、明治期に訴訟問題を起して争うということもあったが、歴史的には当山派は金峯山を中心として、山臥衆が集まり、本山派は大峯山を中心としたものであった。現在大峯山という場合にはこの連峯を総称しており、その中心に大峯山があるということである。

白河院に従って増誉が熊野詣での先達をつとめてから皇室の熊野詣には天台系寺門派の僧が選ばれ、園城寺は熊野との関係を深めたが、そのためこの系統の山臥は熊野→大峯→葛城へと回峯して修業した。この山臥が独立して後、園城寺は修験道への関心を常にもちつづけ、鎌倉後期には修験道の教理が確立するが、それはこの寺門派に拠るところが大きかったといわれる。また園城寺の教界における権威は高く、しかも熊野と関係が深かった事から熊野系の修験者はここに集っていくことになった。室町期に入って増誉が聖護院を賜って一宗を開き、修験道の中心は園城寺から聖護院へ移り、現在に至っている。聖護院の僧は修験道の権威となり、熊野を拠点とする山臥を台密系として統一するに及んで、天台系寺院に拠っていた山臥は聖護院の統

割下に集合していった。三宝院を中心として集った山臥に対して〈本山派〉を自称して今日もなお〈本山派〉〈当山派〉の区分を残している。

当山派は平安期に入って金峯山の隆盛に従い〈金峯山検校〉を設けたが、ここを根拠とした山臥に対して直接的な管理権をもたなかった。金峯山を再興した祖の開創になる醍醐寺を中心とした山臥修業は金峯山を拠点として行なわれ、当山派を形成した。室町中期に本山派が生れ、後期には当山派が成立したとされている。

二、日蓮宗との関係について

修験道の発生について、和歌森氏の研究を参考として以上概説したわけであるが、日本独自のこの宗教が、他の諸仏教へ及ぼした影響についてはほとんど明らかにされていない。またこの宗教の史的役割は日本の宗教教団の展開の問題にとどまらず更に深いものであるように推定されるのであるが、その点も研究の課題となっていない。

今回の予備調査の課題は、今も盛んに行なわれている大峯山回峯修業において、この宗教的実践がどのように個人のパーソナリティの転換と関係しあっているのかを研究するための準備であって、歴史的な研究資料の採集ではなかった。しかし日蓮宗との関係はきわめて深いものであると推理されるのである。

日蓮宗には古くから七面信仰が行なわれているが、その縁起ははなはだ不明確な点を残している。しかし大峯山においていつどのようにして七面信仰が成立したかは不明であるが、この山にも〈七面山〉〈七面大明神〉の信仰があり、現在も行なわれているのである。本宗で行なわれている七面信仰との関係はひとつの研究の課題であろう。また身延山の七面山は、古くから山岳信仰の対象でもあったであろうと推定されるが、今身延七面山頂に〈池大神〉として祠られてある尊像は明らかに〈役小角〉像である。また山麓には妙法二神として〈てんぐ〉〈山の神〉が祠られているが、これも修験道信仰の名ごりであろう。

山伏と対決する日蓮聖人の伝説は極めて多く、その伝説を根拠とする寺の縁起も現存している。ある意味では日蓮宗の祈禱・修法の形成展開は、これら修験道の祈禱と交渉・対決しつつ発展してきたのではなかろうか。

影山教授の研究によれば、BC七〇〇年代に本宗の修法の記録が現われるといわれる。積善坊が加茂川で水垢離をとり、その霊験を現わすとあるが、積善坊一世からこの時期に至る間は推定されるところでは修験道が理念的根拠を

もち、教団的集合形成を行って教勢大いに振う時期でもあるといえよう。このことは、修験道が呪術的な力で大衆に影響力をもっていた時期に伝道活動上これに対抗するうえで〈修法〉を必要としたからではなかったろうか。修験道は鎌倉期を待たず発生の当初から大衆に根ざした民間信仰であり、その庶民への影響力は奈良、平安の上層階級に専有された仏教を、超える独自な力をもっていたと考えられる。おそらく日本に定着し大衆化しつつ自己形成した最初の仏教であるといえよう。修験道は土着のアミニズムの呪術的側面と、密教のなかの呪術的形式のみを伝承流布したという点で低く評価されてきたが、大衆宗教としてはたしてきた役割の意義と内容は再評価さるべきものであろう。特に江戸幕藩体制のなかで〈家〉の宗教として仏教が体制に組み入れられていったなかでも、一部を除く多くの〈山伏〉と修験道の信徒は、個人の宗教としての〈無籍〉の自由を持し庶民のなかに流動しつつ生きつづけてきたのであった。身分社会において山伏の衣装を着すれば非僧非俗であるだけでなく、世俗的身分を超えることができたことは意味深い問題をはらんでいよう。近世庶民のなかで体制によってつくられた宗教の戸籍を超えて〈講〉を生みだし、信仰の自由選択の便法を生みだしたのも、おそらく修験道の信徒集団の形式を真似たものであったのではないかと考えられる。特に日蓮宗にある〈一代法華〉とか〈講〉〈先達〉という言葉は、〈家の宗教〉から個人の宗教へ移った信徒活動の内容を表現しているが、ここに修験道の拓いた宗教集団の形式があるのではなかろうか。

日本独自の宗教として形成された修験道には、日本の庶民の呪術的信仰形態のすべてが内包されていると思われるが、その密教的性格をひとつの系譜としてたどるならば、その展開の線上に日蓮宗における〈修法〉の形態も位置づけられるであろう。その歴史的系譜をたどることによって現在行なわれている〈修法〉の意義も明らかになるであろう。その同一線上には〈神仏混淆〉の宗教と云われ、あるいは神道系とも称されている幕末から明治期にかけて形成された新興諸宗教の歴史的性格や意義も明らかにされるであろう。また今日呪術的な宗教活動で形成され、あるいは形成されつつある無数の新興宗教が、日本の大衆のなかで機能している役割も、ただ否定的側面からだけでなく、ひとつの社会史的テーマとして問題を明らかにして再認されるのではなかろうか。

本宗における〈修法〉の意義は、日本の大衆がその信仰に賭けてきた現実の重み、その歴史的な現実の裏にある地

下水のような流れをつきとめることから再確認していかねば決して明らかにされないであろう。このような課題のあることを修法による布教活動を行っている本宗僧侶は自覚しなければならないであろうし、その地下水は、大乗仏教の高い理念と必ず結合されていくものであるはずである。そのことは修験道をめぐる歴史をたどることによって、ほぼその道筋に近ずけるように思えるのである。

三、吉野山行

大峯山は行政区劃からすると、洞川(どろがわ)村に所属する。従って洞川にある当山派の竜泉寺は、洞川を拠点として大峯山信仰の上で大きな力となっている。吉野山の山間にある洞川は、民俗学的にも興味をひかれる問題をもっているが、そのひとつとして言葉が、〈関東なまり〉であるといわれる。関西系の言葉とはニュアンスが異っていることはわれわれにも感じられた。裁判によって当山派は洞川の行政区劃からくる権利を主張して、大峯山に関する宗教活動上の管理権を本山派と二分してもつに至った。本山派は聖護院や、吉野山の桜本坊など各派に分離しているので更にその権利を再分割せねばならないため結果的には訴訟に敗けたのだと事情を説明している。歴史的に大峯山が本山派修験道の中心であったことは確であるが、現在の状態は必ずしもそうはいえない。吉野山が観光化していくなかで、洞川が大峯山信仰にのみたよっていかねばならない現状からして、当山派の力はあなどりがたいものとなっていくだろう。

女人禁制の山としてはおそらく最後のものとなった大峯山を、修験道に関係ある人々にはいうまでもなく洞川などの地元民までが、一致して守っていかねばならないと応えている。それは大峯山の女人禁制を解くならば、宗教的な魅力を失ってしまうであろうと考えているからである。このことからも、修験道がもつ男の宗教としての特徴がみとめられよう。静御前が義経と吉野山で離別せねばならなかったのも、大峯山が女人を禁じていたからであるという古事をひいて、その伝統が説明されている。

谷あいの洞川から吉野山へ登ると一望に吉野の山脈が開け、〈文学と戦史〉に綴られてきた永い歴史のきらびやかな幻映に誰しもひきこまれていくのではなかろうか。

修験道は神仏混淆の宗教であるといわれるが、吉野には〈十座の神社〉と呼ばれるものがある。吉野水分(みくまり)神社、吉野山国神社、大名持神社、丹生川上神社、金峯神社、伊波多神社、その他に鍬の神の四座があるといわれる。これら

は明らかに農耕民の信仰からくるものであろう。水分神社は今では音よみから転じて本来の水源神ではなくなった形で庶民の信仰を集めているようである。

しかし、美しい山＝吉野山のなかで、文学や戦史の幻映を超えてもっとも感動的なのは、蔵王堂であり――いや蔵王堂に祠られている釈迦・観音・弥勒の三尊像である。

鎌倉初期に再建されたというこの巨大な尊像の前に立つならば時代を超えて日本人の祖先が訴えかけてくる強烈なパンセに魂をゆすぶられる思いに至るであろう。

美しくきらびやかなこの山の印象に反して釈迦・観音・弥勒は決して美しくない。その憤怒の様はひとつの極限を示している。

日本の、大衆のなかに根ざした最初の仏教信仰が、この〈像〉を形象したのだとするならば、何人も修験道に対して再思再念せざるを得ないのではあるまいか。

大峯山への登山口は、もと熊野側からが順路であったが現在は吉野山から入山するかあるいは洞川からするかに分れている。その形式はともかくとして、今なお〈先達〉にひきいられた〈講〉中がこの山へ登っている。そして信仰は〈世襲〉されるのではなく、個人の信仰として受け継がれていく点において、伝統は守り続けられているようだ。このことは既成の諸仏教々団と全く異る点であろう。山伏姿になれば、今も職業や身分は不問となって、ただ修業の実績が大先達とただの講員とを区別するだけである。

伝統されてきたこの修験道が、現代のなかでどのように宗教としての役割をはたし得るものであるのかは、きわめて困難な課題であろう。しかし本宗の〈修法〉の問題についての方途がみいだされていくならば、その過程で、修験道の役割と位置ずけもまた明らかになっていくのではあるまいか。

この問題へのひとつのアプローチとして、四十三年度の調査は、大峯山登山の講員とともに回峯の〈行〉に参加し体験をともにしつゝ実験調査をこころみようと計画した。今回はそのための予備調査であったが、吉野行によってより問題の重要さが自覚され意欲をかきたてられたのであった。なお四十三年度の計画に対しては、聖護院、桜本坊両寺の許可を得、積極的な援助が約束されている。